

プロ野球のスタジアムにおけるバリアフリーの現状と課題に関する一考察 車椅子利用者の見るスポーツの参加について

A study of current conditions and issues of barrier-free systems
in Japanese professional baseball stadiums
Focusing on wheelchair users participation in spectator sport

1K06B014

指導教員 主査 木村和彦先生

飯田唯

副査 間野義之先生

【研究の目的】

わが国において、レクリエーション分野のバリアフリー化は北欧など他の先進諸国と比べるとまだ始まったところである。近年、プロ野球が行われるスタジアムでは数多く改修工事や、建設工事が行われている。バリアフリーに対する取り組みはどのように変化してきたのであろうか。そこで本研究では、まずプロ野球が行われるスタジアムを対象に、バリアフリーの現状をアンケート調査によって把握する。続いて、現地に赴き、車椅子利用者に対するバリアフリーの実態を検討する。こうした二調査での知見を踏まえ、わが国のバリアフリーに関する法制度の問題をアメリカのADA法との比較において考察するものである。

【調査概要】(すべて2009年)

1. アンケートによるスタジアムにおけるバリアフリーの実態調査

・調査時期：11月15日～11月31日 ・調査対象：プロ野球一軍ホームスタジアムの指定管理者・球団

2. スタジアムにおけるバリアフリーの現地調査

・調査時期：8月7日、19日 ・調査対象：クリネックススタジアム宮城、MAZDA Zoom-Zoomスタジアム 広島

【結果と考察】

ハード面での改修の必要性は回答者に認知されており、徐々に改修が進むものと考えられる。ソフト面の問題は、従業員やボランティアなどへの研修を含めて取り組んでいるところもある。特にハード面でのバリアフリー対応が十分でないスタジアムでは、その分ソフト面での対応を重視する傾向がみられた。調査票を回収できた9スタジアムは、バリアフリーの必要性は認識されつつあるものの、設備の現状には相違がみられる。また、バリアフリー設計を前提に建設された新しいスタジアムでもスタジアムの構造や形状によって、対応が異なっていることがわかる。

【結論】

プロ野球におけるバリアフリーは現在、発達段階だといえる。日本の球場において車椅子席が最も多い京セラドーム大阪ですら、174席(全座席の0.4%)に過ぎないのである。一方、アメリカメジャーリーグクラスの球場の場合、1000席はアクセシビリティシートとして用意されている。これは、アメリカと日本の法律による規定の違い、バリアフリーに対する思想の違いが大きく起因している。今までのバリアフリーのあり方では、障害を持つ人は保護すべき対象であり、特別に配慮すべき存在であるとしていた。その対応が、一方で障害を持つ人の選

択の自由を認めず、自己責任を求めないということであり、障害を持つ人の権利を侵害していたのだ。しかし、新しいスタジアムには、実際に障害を持つ人の声が反映されるなど、当事者が不在でハード面だけに終始していると指摘された日本のバリアフリーの考え方に少しずつ変化がみられた。

障害を持つ人の利用頻度の高い施設のバリアフリー化が進む一方、レクリエーション分野での改善は後回しとされがちであるが、すべての領域でのハンディキャップを軽減することが社会の義務である。とりわけ発達が遅れている見るスポーツにおけるバリアフリー化はこれからますます行われるべき分野である。スタジアムをはじめとするレクリエーション分野のバリアフリー化も、日常の要件として、障害を持つ人や高齢者の声を聞きながら、一層取り組まれるべきである。